

武家名目抄稿

稱呼部

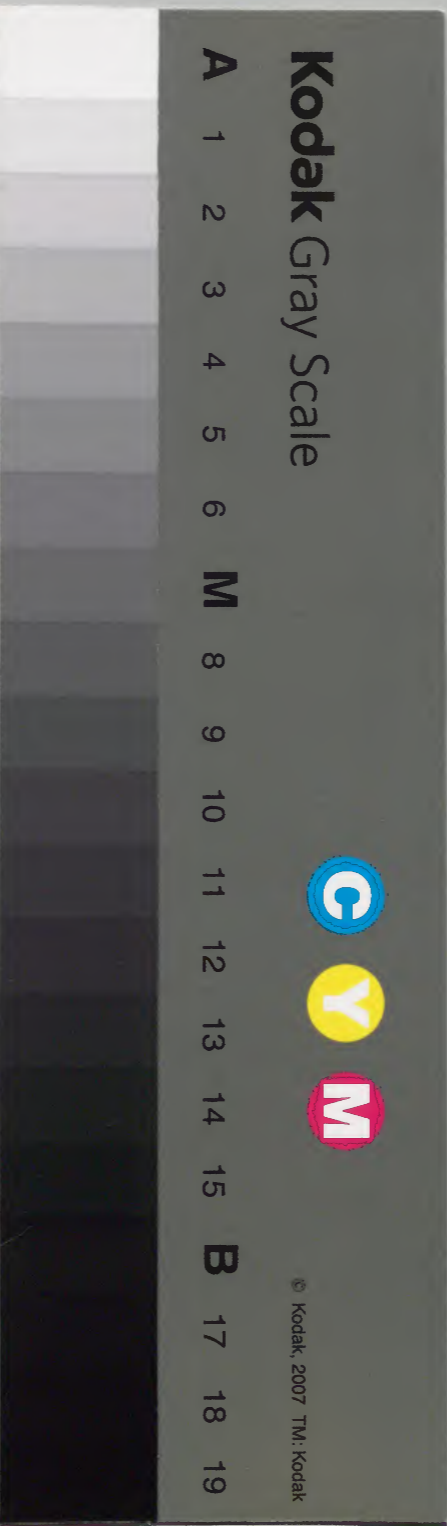
廿一

和書門類	二五二り六	七七函	四五六四九冊
------	-------	-----	--------

和書類	二五二り六	四五六四九冊	五三函
-----	-------	--------	-----

内閣文庫	番號	和 25206
	冊數	457 (116)
	函號	153 275

153-275
116 143



武家名目抄稿第廿一冊

称呼部十一中目錄

家子

家臣

家僕

家士

郎等

郎從



所従

従者

陪従

股肱之者

内之者

武家名目抄稿第廿一冊

武家名目抄稿第廿一冊

称呼部十一中

家子

下六十九ウ

平治物語云大將軍ニハ悉右衛門督信頼

子息新侍従信親中郎等ニハ鎌田兵衛政

清後藤兵衛真基佐々木源三秀義熱田大

宮司太郎ハ義朝ニハ六男ナレハ我身ハ

上ラ子トモ家子郎等差上ス



ニ、三、三、ウ

平家物語云新條被新大納言冬山門強初

にすのく姑の命をぢい志のくくをくら

まのうもと内義ま度者まあくありし

其義覺計ては謀報叶へしともみえきり

多礼ハうもれおきたりつる多田花人行鑑

はよの玉蓋なりとあか心也法きよけん蒙

志料しきりて送りおきたりきり希古をいぢ

番帷し裁縫を家子郎等在兵ま世法目

うら瞬てあうりくらつら平家の覺留

するありしまをうらふ高時たわすう願

くく一美は事浅ぬら極るく行鑑先う

一かりおきんは他人れ口よりもおぬき子

過りおして帯生まと思あうつきり家

又云のせいあんせんの條あんせんの條の御所を

おとろくくハソ人のふ二人らうまう十人介

たうりやうう経のまあとしのふ二人ら

うきり十人うきりうきり二人のソ。の。子。ハ
まゝの云郎むひうね初きれ後四郎
うきりうきりうきり十人をいふ
うきりうきりうきりうきりうきり
うきりうきりうきりうきりうきり

^{七、四、十、ウ}源平盛衰記云 山門 興 振 條 既ニ門前近クイラ

セ給ケレハ頼政イソキ下馬ス甲ヲ又キ
弓ヲ平メ左右ノ膝ヲ地ニ突キ頭ヲ頷テ

拜山奉ル大將軍カシケル上ノ家子モ

郎等モ各下馬シテ拜ミケリ

又云 縮笠 合 戦 條 大介ハ敵寄ルナラハ暇アル

マシ先ツ静ナル時能々兵糧ツカフベシ

トテ酒肴焼飯舁キ居テ是ヲ勸ムサテ下

知シケル莫ハ弓シタ、カニ射者ハ家子

モ侍モ舍人草芥ニ至ルマテ汰置弓ハ一

人シテ二挺三張矢ハ四腰五腰モ用意セ

曰云々

又云重衡向二南中將ハ本ノ道、ヲ送リテ

正面ノ東ノ間本ノ座ニ西向ニラハシケ

レハ彼ノ僧ハ西ノ妻ヲ廻テ正面ノ西ノ

間東向ニソ候ケル真平ハ縁ニアリ家子

郎等ハ壘ノ中大庭ニ並居タリ

吾妻鏡云元暦元年九月十四日庚子河越

太郎重頼息女上洛為相嫁源廷尉也重頼

家子二人郎從三十余輩後之首途云々

又云建久元年十一月七日丁巳二品御入

洛申尅先陣入洛三條末西行河原南行令

到六波羅給其行列先貢金唐櫃一合次先

陣畠山次郎重忠着黒糸威甲一家子十人相具之

又云寶治二年後十二月廿八日辛未日阿

称不能費紙筆而献覽一通文書是則石大

将家御時注為宗之家子侍交名被載御判

之御書也義時北干時江間為家子專一也

兼久トセウ軍物語云取うちやうよりとも卿年

家成ちあつ河うらん一やう小後志川乃

院日中うれそり地とう城路りうとうあり

て記ついろ六う梅んあひさあひいお

屋やうたせ子城うせけうひあうをう

せりの子城うういふあ家人ともふく

んろうれあれくああうあわちたひ

あらんちとうあうけさるさいふとれ

ううさよりと記うけうひうてあうた

めちううやうういさうさ幸よううさ

ア云々

梅松論云何事かあへきとう角の列中子

自害をるるあううあ業数百人同命を落す

南方時益七の秋四氣河東を流矢よあ

アて死をうもろあ。子以を取と南ふ子

三百七十一世九ノ

持系りの下署

大塔軍紀云小笠原長秀撰定吉日良辰打
入善光寺長秀其日出立路以行旌親と満
縁羅耀天形勢拂南署中其次家子名黨三
十家人持金銀作太刀二行云々

又太平記云山名伊豆守落美作城條菊池カ家。子城越前守

ハ謀アル者也ケレハ云々

又云天正本三角入道属直冬一條義詮美濃ヨリ上洛ア

リテ周海房ヲハ頼テ佐々木六角判官氏

頼ニ頼テレ終ニ六條河原ニテ佐々木家

ハ子木村源三請取テ忽ニ誅セラルトカ

ヤ

伯耆之卷云六條少将殿宮人等ハ端々如

乃一族有面々如為持テカヲを討テ作れ

多々人ハ一族其の中ハ大略三人張を仕

ト中物如子長高家の子若黨等遊々ト馳

来と無徳百五十張斗ふ城ふりう

宝町殿日記云 陶隆房道 紀後の玉りい安

藤弥太郎左衛門武少妻丸秋月種実をさ

記とくふとくを因心せりさくまを防

長此其中うき内藤隆世云海監物弘中云

河と宗とくして重慶のふとくは上とく

うふ如ふふとふり陶々部乃ふふ深野弾

正康院宮川左衛門房播う前ふかふまは

くやりのきとく

産ふと記云めいりんは為くとく事由大の

是の家の子れとふの役をく

加賀与身満筆記云南方所家子所人をも

ゆり急い系人く市巾市報を報を

各開と記云常武の時、素袍上下を若ある

身とさう餅喰役人、急なりさくをさへし

如は餅喰役人も庄安ふ安産くく者の餅

此處持るもゆる及人回條持る出へ
是れと名付しつちをさへしう根のめ我
家。女子又ハ久我内志より付へし

常陸大掾傳記云家子ト云ハ本領ヲ持タ
ル名代ノ人ノ奉公スルヲ家子ト云也一
家ノ端ナレトモ本領重代ノ名字懸ル取
ニナキ人ハ家子トセス是ヲ家人ト云ナ
リ

二百八十二、八分

鎌倉大弟紙云山下野古七里灘より馳む

うと防戦ひ多敷く水も海も辨りて家の子

郎等八十余人討死して其身と名負引退く

云々

下三十九

今川大弟紙云蓋持る事主人と同事

れしうすハあふれを中にもさくち多し

多し一客人常盤の方よりあは客人乃

そはふ多しうす也初秋の蓋を去後し

とある。忠信の子として主人の一家一族家
子ゆき出

新藤親基記云寛正七年二月廿五日家子同
姓所を以別紙記す

江濃記云存藤殿ノ故道三ヲ討シムクヒ
ニヤ政道モ次第ニ乱テ以来ハ人ノ國ト
ナルヘシイサヤ信長ヲ引入奉リ道三遺
言ノ通りニ美濃ヲトラセ奉ラント一同

ニ評定シケレハ日根野備中守此由シヲ
聞テ弟ノ弥ニ右衛門ヲ近付ケ西方衆三
人信長ヲ引入龍興ヲ打奉ラントノ企テ
有リサアラニ於テハ此國滅亡疑ヒナ
シ三代ノ主君ヲ打奉リテハ無念ナリ江
北浅井備前守ヲ此國へ引入テ先ツ遂ニ
戰其上ニ永井隼人佐ト相談シテ龍興ヲ
此國ノ傍ニ隱居サセ備前守ヲ稻葉山ニ

スヘ置キ其威ヲ以テ我等兄弟先懸シ尾
別ヘ乱入ルヘシト評定シ家ノ子日根一
野助右衛門ヲ以テ浅井玄蕃所ヘ遣シケ
ル
江北紀云當方御家わろ比事古角殿志家
辰その一弟辰辰及蒼所兄弟也其子細川家
子日根也

新撰信長記云日根野備中守浅井日根野

野此由ヲ聞出シ弟弥次右衛門ヲ近付西
三人ノ者ニ信長ヲ引入龍興ヲ討奉ラシ
ト企有サアラシニヲイテハ此國ノメツ
ホウ疑ナシ三代惣恩ノ主君ヲ将ニ打セ
奉ラシモ無念ナリイサヤ浅井備前守ヲ
此國ヘ引入畧中我等兄弟先懸シ尾張ノ國
ヘ乱入ルナラハ信長ヲ打執ン支何ノ子
細ノ候ヘシト思フ如何スヘキトイヘハ

弥次右衛門尉兼宜キエニテ候へハ早々
使ヲ被遣可為最ト申サアラハ誰ヲ可遣
ト有シカハ兎角御家子日根野助右衛門
尉可然トテ具ニ言含浅井玄番九所へ書
札ヲ添テソ遣ケル

関八州古戦録云滝川一益武及町ハ元上
藏野合戦條

刈ノ和田兵衛大夫カ家子タリシカ故有
テ浪客トナリ信刈ノ高坂彈正忠昌信ニ

仕へ近年氏邦ノ手ノ者ト成レリ武藤ハ
武田晴信ノ家ニテ毎度ノ走回リ場数有
テ信玄勝頼二代ノ感状教通ヲ所持ス甲
刈没落以後北條家エ来リ本知二十貫文
ノ由分明ニ付テ其通ヲ宛行ヒ氏邦構置
レタリ今日兩度ノ合戦ニ七度マテ鎗ヲ
合セ三度分捕シタリシ故氏直ヨリ感書
ヲ授テ引出物与ヘラレヌ

義殘後覺云左アヲハトテ廻父ヲナス所
ニ属後ノ者都合ニ万七千富田ノ若山へ
ソ着陣ス去レハ事露頭スルニ依テ陶カ
家ノ子ニ深野ノ彈正房隆宮川左衛門尉
房勝尾張守ニ向ツテ涙ヲ流シテ申様此
御謀叛ハ偏ニ隆房ノ胸中ハ天魔カ入
ルト存ス云々

又云叔中將殿ハ住持ニ寂期ノ十念ウケ

給テ自害シ給フ一忍軒モ御自害ナサレ
ケル其ノ時権六ハ阿波守ニ向ヒ申様某
、此君ノ家ノ子ニ平岡権六道高ト申
者ニテ候云々

毛利家記云秀吉公被仰シハ北條今ニ至
テ上浴セス我ヲサニスルトヲホヘタリ
和朝ニ於テ我ニタテツク者有ヘケンヤ
彼ヲ亡メ後代ノコラシメニセント宣

ヒテ既ニ都ヲ打立ヒ玉フ北條由ホノマヲ聞テ
家子老中ヲ集テ云ク閑白卒大勢下ルト
云氏怖ルニタラス云々

荒山合戦記云利家白旄ヲ打振々々進ヤ
々々敵ニ息継スナト自真先ニ進タレハ
家ノ子郎後主ヲカハヒ馬ノ前ニ馳塞々
々死ヲ爭テ攻シカハ流石ノ惡僧溢者共
モ後ノ火ニ途ヲ失ヒ云々

又云前田利家ハ伊賀ノ偷組トテ五十余
人扶持シ置シカ彼輩ヲ招テ今敵軍スル
躰ヲ見ルニ物ノ用ニモ可立程ノ者ハ打
出テ合戦スルト覺エタレ坊カ院カニ墓
カシキ人ハ有コレキソ汝等忍入テ院々
坊カニ火ヲ放テ焼立少々老法師小法師
原中ニ敵對スル者ヲハ斬テモ捨ヨ中畏
候トテ院々坊カへ忍入テ窺ヒミルニ業

ノ如ク手ニ可立人ハナシ小法師原ノ少
々残タルヲ追散シ十余ヶ所ニ火ヲ掛タ
リ去程ニ黒煙リ覆天折節魔風頻ニ扇テ
院々ヨリ諸堂ニ吹掛タレハ感陽三月ノ
火ヲ一日ニ合セタル歎ト覺エテ夥シ寄
手ハ弥氣ニ葉喚叫テ責掛利家白旄ヲ打
振々々進ヤ々々敵ニ息絶スナト自真前
ニ進タレハ家ノ子郎從主ヲカハヒ馬ノ

前ニ馳塞々々死ヲ爭テ攻シカハ流石ノ惡
僧溢者共モ後ノ火ニ途ヲ失ヒ手足モナエ
ル心チノ防難ク思ヒケレハ本堂差テ引退ク
奥羽永慶軍記云湏賀川川井茅根ニ向テ
敵手シケク追詰タリ倡ヤ我々討死シテ
味方ヲ落延サント云ハ茅根最ト答ハ二
騎共ニ取テ返シ大音上テ是ハ佐竹ノ家
ノ子ニ河井甲斐守忠脩茅根土佐守通正

ト云者ナリ我ト思ハシ者ハ手並ヲ見ヨ
ト云マ、ニ手ノ者三十騎嚮ヲナテヘテ
敵ノ大勢ニ分テ入

^{十七才}豊瀬云上松原勝者越後の勢を具して河
中流を急ぐ羊吹の味を越松枝の味ヲ押
下流を急ぐは小條の家の子太道守とソ
者城をちりちり居る

家臣

叔井日記云 合撰列青野 今將軍、合体ノ印

シハカリニ一矢ヲ致スノ処不慮ニ若者

トモ楚忽ノ強ハタラキニ及ヒ又ハ某カ

軍立御帰リ路ヲハ関キテ候トモ 中又御

自害ナトミアランニハ御心易ク備ヲ引

ノケ申ヘキニ候忠義ノ御家臣衆ヲ古郷

ヘツカハサレタク候ハ、御心易ク送ル

ヘキニテ候

豆相記云景席退於相州欲入上厩橋城矣
北條家臣中條出羽守自武江戶城出銳卒
追及景席于武府中而多擊殺於越甲自此
東國又版于北條云々

家僕

江濃記云利藤ノ子利綱ニハラク家督ヲ
ツケリ此人ノ時吞藤家絶断ス然ニ吞藤
家ノ家僕ハ永井藤左衛門同豊後守等也

豊後守ハ山城國西ノ岡ヨリ穿入ルテ吞
藤家ニ來リ藤左衛門カト成テ度々
合戦ニ勞功ヲツミ永井豊後守ト号シテ
彼ノ家ノ家僕ト成ル吞藤ノ家督断絶ノ
時彼ノ家領ヲ兩人シテ知行ス

家士

三百八十五、九
豆相記云景席亦攻甘繩城城主綱成未_下在
有木在城故長子左衛門大夫氏繁居之自

取於鉄鉞而戰雖越甲多為一人猶豫而郭
外送數日矣景虎士平日服北條家士時罷
而當家危急廢亡之秋非今而又何日哉

郎等

將門記云今良兼尚衝忿怒之毒未得殺害
之意求便伺隙終欲討將門于時將門之駟
使丈部子春丸依有因緣屢融於常陸國石
田庄邊之田屋即召取子春丸問案内申云

甚以可也今須賜此方之田夫一人將罷漸
々令見彼方之氣色云々彼介愛典有餘惠
賜東絹一疋詔云若沙依實令謀害將門者
汝省荷夫之苦役必為乘馬之郎頭何況積
穀米以增勇分之衣服以擬賞者

後三年軍記云柵をせむ事日數小ありし
以魚とてつゝたゝ元守將軍此兵とて
心をいけりしむとあり日とに甲乙乃産成ふ

む宅をり日なりて甲小み抱るとよも
を一度おとく隠れんゆゑなつて
りう勝流は季方なん一度も隠れ
る中けりかへもさしやゆめ感さす
事明し季方は義光の郎等なり物
等とも北中お在城得事る兵此
度とん勝物なりときさゆめ志
首等りし合是此北中と
先

義光物語云義光公と氏家尾張守
等其を家の子郎等五集軍評定有
係元物語云山田小三郎の相
らやよるんてたふささる
うんうら身れけんきり
魚らうぞうまてはれん
らりしき安走の一人を
かうわはるるのらち

その一人とありある

平治物語云大將軍ニハ下十九ウ忠右衛門督信頼

子息新侍從信親中郎等ニハ録田兵衛政

清後藤兵衛真基佐々木源三秀義熱田大

宮司太郎ハ義朝ニハ小舅ナレハ我身ハ

上ラ子トモ家子郎等差上ス

平家物語云法盛シハ安藝守たりハ時保

勢國阿部はさうありて然聖ハ美々述りる

おちる。鐘の音へさう入らうきり成る道

ハさうきり是きめさう記西兼くぬまの久

ハヤハさき入道相國よりハ十戒をた

とらう精進樂有の道うれとも昔因武王

此舟より白鳥を躍みたりれとも酒味し

く家身らうの家子郎等さうもさうとらうせ

らう

源平盛衰記云山門御神輿既ニ門前近ク

イラセ給ケレハ頼政イソキ下馬ス甲ヲ
又キ弓ヲ平ノ左右ノ膝ヲ地ニ突キ頭ヲ
傾テ并シ奉ル大將軍カクシケル上ハ家
子モ郎等モ各下馬シテ并ミケリ
又云五節夜
闇討條忠盛朝臣ノ郎等ニ進三郎大
夫平季房カ子ニ左兵衛尉平家貞ト云者
アリ本ハ忠盛ノ父正盛ノ一門タリシカ
正盛ノ時始テ郎等職ト成リタリシ木ユ

馬允平貞光ノ孫也

又云小坪合
戰條本田ノ次郎中ニヘタマリテ

書ニ押ヘ云ケルハ命ヲ捨ルモ由ニヨル

宿世親子ノ敵ニ非ス只平家ニキコエシ

計リ一向ヲニヨソ侍レ就中三浦ハ上下

皆一門也秀出ルヲ大将トシ成後ヲ郎等

乗替ニ仕フ

を、か、た、ち、あ、紙、云、我、君、の、内、外、人、の、あ、り

ふほろふらうまみよしをいふんと
にハ清勢次郎たるのよらう地一井いせと
驩河の東鎌倉のふれうぬ今又まに
返り水多きくを一里あり給き子所百河
の四折んに人志とま給ふは^キたのゆ
しよかちくまきとれたらうまをとも給
ふ我らうこれ水もありのふとのうらまを
いせめまき古國にふ々必水初給うまき口た

いせれ

義久軍物徳云去福ふ所一りん
まうれ名うまふまきあひつらま二位と
の御まへまのてあんなのふあし此いん
ととりふ^中いふ傳ととたしうりまあふ
ほあんなう傳むしハこと世のあらんま
まてふと城あふまらま一のあしとあふ
ハのころうたうまをられらふおつらま

のゝろとつくととととせのさいきゆうふち
うつとらみうらる時いちけうしと
うゆうしをあらうちしやう後これをおえ
れせおひとせを六月まつめうんよあ
ふ人のあつせおゆうにあまいし人は
よ後らあゆのうらりめくうふあまけふ
うさあふさうしをめおせれまらせこんとあ
ううのあう仕らんうゆこんとうよあ

うらう仕らんうあううらうふ中うれと
あうまひううあう
又云^{サウ}あううむうさうあううあうむん
とととむうをうううううううううう
ととのあういいううんうううううあうあ
河よのうんていとてあううううううあ
いうてとあううと心あうううううう
てむううううううう^{佐野}あううううう

阿比郎小阿右郎阿曾あそのち郎同云郎山崎
江三郎那波あそのちの後八以下五十歳すううそや
そむいふはあてそこのを記しう身とち十
そのせしを引きーちううへうううち
とあり

太田美作守康有記云建治三年十月十四
日遠江十郎左衛門尉與叔本六郎左衛門
尉郎等浮沢左衛門尉云々於建長寺前衆合之間十

郎左衛門尉下人致宮浮沢左衛門尉仍十
郎左衛門尉相具下手人參山内門前之處
被召預于武藏守殿云々
伯耆之卷云徳長高敏小お節者在名家子
郎等成石穿と記中り多き隠岐の帝長高
を御頼ありと記す古切の漢へ所叙を被恙
自傳中勅使を被下石男瑞子は時小生會進
くふとわふ勅定小記りの生前の面自竹

津ヶ屋より

太平記云長新左衛門尉意阿新未幼雅十

レ氏ケナケナル所存有ケレハ父ノ遺骨

ヲハ只一人召仕ケル中間ニ持セテ先我

ヨリサキニ高野山ニ参テ奥ノ院トカヤ

ニ收ヨトテ都へ帰シ上セ我身ハ勞ル夏

有ル由ニテ尚本間カ館ニソ留リケル是

本間カ情ナク父ヲ今生ニテ我ニ見セ

サリツル鬱憤ヲ散セント思フ故也角テ

四五日経ケル程ニ阿新晝ハ病ノ由ニテ終

終日ニ卧シ夜ハ忍ヤカニヌケ出テ本間

カ寢処ナント細々ニ伺テ隙アラハ彼入

道父子カ間ニ一人サシ殺ノ腹切ランス

ル物ヲト思定テソ子ヲヒケル或夜雨風

烈シク吹テ番スル郎等ヒモ皆遠侍ニ卧

タリケレハ令コソ待処ノ幸ヨト思テ本

間カ寝処ノ方ヲ忍テ伺ニ本間運ヤツヨ
カリケン今夜ハ常ノ寝処ヲ替テ何クニ
有トモ見ヘス

又云唐崎濱後陣ニ引ケル海東カ若黨八
騎波多野カ郎等十三騎真野入道父子二
人平井九郎主後二騎谷庭ニ討レニケ
リ

又云鎌倉合戦義ヲ重シ命ヲ輕メ安否ヲ一

時ニ定メ剛臆ヲ累代ニ可レ殘合戦ナレハ
子被討共不扶親ハ棄越テ前ナル敵ニ懸
リ主被射落共不引起郎等ハ其馬ニ棄テ
懸出或ハ引組テ勝負ヲスルモアリ或ハ
打替テ共ニ死スルモアリケリ其猛卒ノ
搦ヲ見ニ万人死メ一人残り百陣破テ一
陣ニ成共イツ可レ終軍トハ見エサリケリ
中國治乱記云尾張守全姜モ不レ叶シテ自

害シタリシヲ首ヲハ小袖ニツ、ミ岩ノ
間ニ押入其後郎等自害シケルヲサカ
シ出シ供ノ侍七人ト以上首ハ八ツ有リ
シヲ生捕ノ者ニ見セケレハクチハノ小
袖ニツ、ミシハ全姜ノ首ト申シ泪ヲ流
シケレハ則クギヤウニスヘ實檢ノ後七
日市ノ洞雲寺ニテ葬礼アリ
應永記云大内ハ民部丞ヲ不討トテ向フ

敵ヲ切拂ヒ刺殺シ民部ヲ後ニ欲隔民部
ハ大将ヲ不討トテ向フ兵ヲ打叛ケ互ニ
吾先ニ討死セント戦ケリ主ハ郎等ヲ不
討トシ郎等ハ主ヲ不討トテ馳合々々散
カニソ戦ケル

又云敵手痛ク禦戦ノ間北畠少将ヲ始ト
ノ矢庭十余人討死ス郎僮走倚リ少将ノ
既ニ討死ノ由ヲ父源大納言ニ告ケレハ

云々

古依日記云在六日狩つゝのたちをある
小あゝのあゝ郎等とてよまのあ
あゝ

鎌倉古紙云あゝてあゝ此調義終る因
十月二日戌の刻さるる新正書殿并持伴
あゝあゝ教中さるる西の院へ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ



是谷此あ人の子あ者也引率に夜塔下
里あゝあ切鹿垣を結渡し乞無念をあ
持指をつきあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
うあたてゝ

又云小山下野も七里灘に馳けり
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

松田長秀記云永享十二年七月廿五日大

將御拜賀供奉行列次第中次一騎打被衣著

畠山尾張守持國佐々木治部少輔持光富

揆介持春土岐美濃守持益左衛門佐義淳

執干時權執權郎等十騎大惟直並自余一騎打

騎馬無之

新撰信長記云渡邊勘兵衛其時ハ十六歳

ニテ真先懸タリシカ引取時何トカシタ

リケン鍵ヲフミ落サレ鍵ヲ捨テハフカ

也トテトリニ帰所へ敵切テカレレハ

落タルヤリヲオツトリナシテ敵ヲ突

タラス勘兵衛カ郎等赤居久作ト云者走

懸テ首ヲ取

安土日記云林新二郎并家子郎等枕ヲ並

討死也林与カニ加藤次郎左衛門ト申者

尾張國久々取合ノ内爰ハト申時ニハ能

矢ヲ仕候テ覺ノ射手也

護信家記云鎌忠山根ノ城へ紫内セサル
トテ輝帛手討ニセラレ鎌忠カ郎等二千
計討殺シ前橋ノ城ニ北條丹後ト云侍ヲ
指置

氏卿記云秀紀ハ本ヨリ一家ノ惣領ナレ
ハ家子郎等共ノ思ヒ入モ深キ故ニヤ定
秀ノ味方シケル者共モ多ク心替リシケ
レハ遂ニ定秀日野ヲ被追出云々

會津四家合考云河原田治部盛次每度中
途工出向テ手痛ク防キ戦ケレハ盛秀軍
ニ不利メ引退ケルカ程ナク寒氣烈クメ
雪降積リ人馬便ヲ失ケレハ盛秀続テ寄
セ得サレ且且ハ政宗ヲ敵トスレハ斯テ
始終叶ヘウモ不覺サアレハ身上ノ有増
ヲ伏見エ註進申太閤ノ思顧ニモ預ラハ
ヤト思ヒ縁脱ナレハ横田刑部ニモ此夏

斯ト相談シテ郎等ニ主膳、道玄佐ト云
者ヲ廻國煩礼ノ様ニ出立セテ伏見ニ上
セ石田治部少輔三成ニ便テ莫ノ由ヲ注
進シタリケレハ云々

愚耳曰聴記云小島道近忠條甚時小島謬代
の郎等千町田藩多情と事名のある事々々幸
比度供一たり此者いそぐ先ト云々小島在
此先玉極うそいゆ先ある事々々此説とよ

大浦の右軍勝軍と云々いそぐ先めり其時
へりり云十人平して何種のもの、仕出さ
るる

又云和徳後波ハ兄弟ありを左者小
立謬代の郎等五十餘人並後左者小
立為伝公此以謬代人古者一文字よりおくる

オニオ奥羽永慶軍記云佐竹武威盛事佐竹義昭
より今義重ニ至ル迄其威振遠近シカハ

奥州ノ内マテ幕下数多ニソナリケル中
常陸國中不煩ヲハ攻靡ケ煩フヲハ自皆
郎等ニソ催サル

郎從

保元物語云正法百三十一とありしを
義朝
平家朝の郎等もあつた所の任人藤田次郎正
法と居たりれハあつた家のろ。う。あ。う。こ。う。ん
なれたちお軍れあつてあつた列あつてけり

の給へハ云ハ

吾妻鏡云元暦元年四月八日丙子本三位
中将自伊豆國来着鎌倉仍武衛點郭内屋
一字被招入之狩野ハ一族郎從等毎夜十
人令結番守護之

又云文治五年八月九日丙申入夜明旦越
阿津賀志山可遂合戦之由被定之爰三浦
卒六義村葛西三郎清重工藤小次郎行光

下_四人 以上七騎潛馳過畠山次郎之陣越
畧_中此山欲進前登畧_中七騎終夜越峯嶺遂馳著
木戶口各名謁之處泰衡郎後部下伴藤八已
下強兵攻戰云々

又云^{九四十一}文治五年九月七日甲子宇佐美平次

實政生虜泰衡郎後由利八郎相具參上陣

置_中畧_中景時頗頽面參御前申云此男惡口之

外無別言詰之間無所欲_中紕明者仰云依現

無禮囚人咎之欬尤道理也早重忠可召問
之者仍重忠手自取敷皮持来子由利之前
令坐之正礼而誘云携弓馬者為怨敵被囚
者漢家本朝通矩也云々

又云美久三年六月十二日乙丑武州逢行
時感悅之餘畧盃先請座上_中次與彼盃於行
時令_中太郎時氏引乘馬_中剗至干所具之郎
後及小舍人童召幕際典餉等云々芳情之

儀觀者弥成勇云々

貞永式目云政人皆事於侍者可被没収所
領無所領者可被如流罪至于郎從以下者
可令召禁其身

又云於道路過捕女事於御家人者百箇日
之間可被止出仕至郎從以下者任在大將
家御時之例可剃除片方之鬘髮也

太平記云信忍自普恩寺前相摸入道信忍

モ假粧坂へ被向タリシカ夜晝五日ノ合
戰ニ郎從悉ク討死ノ總ニ二十余騎ソ残
ケル

又云金剛山寄手美久ヨリ以來平民世ヲ

執テ九代曆數已ニ百六十余年ニ及マレ

ハ一類天下ニハヒコリテ威ヲ振ヒ勢ヒ

ヲ專ニセル所々ノ探題國々ノ守護其名

ヲ奉テ天下ニ有者已ニ八百人余リス况

其家々ノ郎。後タル者幾万億ト云。数ヲ不知

又云拓岡條小清水ノ軍ニ赤負テ引退兵

二万余騎四方四町ニ足ヌ拓岡ノ城、我

モカカトコニ入ケル程ニ沓ノ子ヲ打タ

ルカ如テ少モハタラクヘキ様モ無リケ

リ角テハ叶ニシ宗徒ノ人々ヨリ外ハ内

ハ不可入トテ人ノ郎。後若黨タル者ハ皆

ソトヘ追出ノ四方ノ関下ニタレハ云々

陸奥話記云有人説將軍曰永衡為前司登

任朝臣郎。後下向當國厚被養顧勢領一郡

而娉頼時女。以後戴大守合戰之時与千頼

時不属舊主不忠不義者也。

室所殿日記云義長條不不の城之郎。後与カ

小ソソ不度々粉骨也。切我切を注も

心へともおき控りし子と云くハソソと云へと

七一多於正初賞了ありしり何く士
卒ソモ事々々々々々

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五

日大将御拜賀供奉行列出仕人々伺候次

茅茨蹲踞侍所入帶甲冒干時赤左京大夫

第伊豫守義雅勤其役郎從三十騎召具之

松田長秀記云永享十二年七月廿五日大

将御拜賀供奉行列次第先陣侍所干帶甲冒干時赤

松左京大夫入道性具依多源郎從参十

騎召具之

布衣記云馬の時僮僕者奉衛府時々臺一

人郎從二人洞夜惣一人舍人二人中間六人

其儀ハ隨時々々人の着意中間隔り上り志

召具

播州任用軍記云五月城攻除日政範亦酒

者持セテ出ラレツト荒面白ヤ珎ヤ酒宴

興ニ打モ子ヲレヌ遊女ノ人ニ問レヌ
亦思アリ同シ太山ノ冬木立嵐ヲ獨ヤ聞
ヘキ吾モ諸共敵トテ一盃受ケテ畧真嶋
ヨリ政範乞請ラレテ一受其レヲ鈍子へ
移サレテ外様ノ郎後親キ陪臣マテニ賜
リ云々

荒山^{ナシナ}合戦記云利家白苑ヲ打振々々進ヤ
々々敵ニ息継スナト自真先ニ進タレハ

家ノ子郎後主ヲカハヒ馬ノ前ニ馳塞々
々死ヲ爭テ攻シカハ云々
松原自休手録云軍退散ノ刺津田長門守
駈合之入鎗然処ニ織田河内守折合テ突
伏首ヲ討戸田カ郎後鶴見金九衛門双枕
遂忠死云々

所從

上
吾妻鏡云建久二年九月廿一日丁卯為盛

覽海濱出稻村寄辺給有小笠懸勝負署中上
下催興秉燭之程令歸給之間雜色沢重典
盛時所後有喧嘩各被疵云々

廿二又云建久六年五月十五日己亥令夕於六

條大宮邊三浦介義澄郎等典足利五郎所
從等癸鬪乱依之和田左衛門尉義盛佐原
左衛門尉義連以下馳集于義澄旅宿又小
山左衛門尉朝政同五郎宗政同七郎朝光

以下大胡佐貫之輩集足利宿所將軍冢被
遣景時於兩方被仰和平之儀間入夜令靜

謚云々

九又云建曆元年六月廿一日辛丑三味莊雜

掌殺害之男露頭被召禁之故野三刑部丞
成經所後也主人他界之後橫行所々云々

十太平記云三浦大和多和カニル處ニ六波羅

邊落ノ近江ノ番馬ニテ悉ク自害ノヨシ

当来ケレハ只今大敵ト戦中ニ此事ヲキ
イテ大火ヲ打消テアキレ果タル事限ナ
シ其所。後眷属共是ヲ聞テ泣歎キ憂悲ハ
コト喻ヲトルニ物ナシ

從者

^{四十八}奥州後三年記云志^衛子^子さうらうらうら
海道小倉郎成衡とらふとのをさととて三年
し^しりて妻さうらうを^志志^衡成衡

う妻さうらうむ^ささ^のうち^は人ハ^を後者
とあり

陪從

^{十五}吾妻鏡云建久六年十一月十日辛卯鶴^足

御神樂也將軍家有御参陪從江左衛門尉
景節唱秘曲等干時風雨俄起始有神感之

瑞云々

股肱ノ者

東遷基業云信長公圖治ひく一面くありと
そ即ちさきふちありてはれくも衆ありて
城子吾股肱の者としてと記さるる事あり
討果さるる敵大勢を遣はしてされ小忠也
と出合さる信長くうあて末代すくは
恥辱さる所後討死したる者として記さる
衆者と云せんしと記さるる事あり
軍勢此方大なる事此城子之糧を遣は納

是を方と云はれは根柢を討つての戦を行
旅中の者としては其條の城を攻めし一僅に
残る者とも大なる事始す事ありと味方
悔り此方を行きて者ありて無二無三に切
入義光の首を自ら取る我首取らりし
二ツの間より身の出るを極く大なる面く自
分の意に任せてしつと清水の城を打
出ぬ

内之者

下、セウ花宮三代記云應永世年十二月廿五月初

雪薄雪也管領道端成同御方成初雪成始也大

名折紙千疋進上リ初會所成又折紙有

增阿弥参御服袖一被貪寄被下也自御方

御スリ被下管領已下大名小袖ヌカル

兩御所御供人皆ヌク管領内者ヌクナリ

上、セウ建内記云嘉吉元年三月八日六師庄代官

職補任状以明日ニ付今日書典小倉小三

郎飯尾肥前守印者也以淨華院石見房傳達之

又云十三日丙戌今日於禁中東有松囉夏

室町殿被仰近習并小番衆等被盡風流被

召進候中於大名者身身只着單物内ニ参リ

候子息并内者等悉沙汰云々

廿六才家中竹馬記云小ニ此時ニ自記ニ感ニ

大名ニ必持セ不ニ為リ招キ以テ謂フ

此の事也。大石北内。為と。式装北内。古白紀
等。袋。今。装。名。止。後。似。也。云々

巖助僧正往年記云天文十八年三月朔日

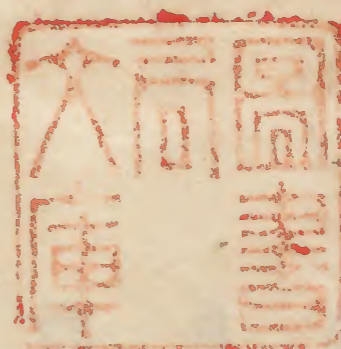
自江及為公方御警固人衆九頭罷上於御

所御近邊取陣之處北郡衆土戸正字可人

衆与上野内衆喧嘩及大篇終日合戰公方

衆悉馳集云々

瀨前北内。為。公。方。御。警。固。人。衆。九。頭。罷。上。於。御。所。御。近。邊。取。陣。之。處。北。郡。衆。土。戸。正。字。可。人。衆。与。上。野。内。衆。喧。嘩。及。大。篇。終。日。合。戰。公。方。衆。悉。馳。集。云。々



明治十五年四月七日四稿校正
全年四月十五日再校英書

同年四月廿一日以四稿一校加點畢

小野由久
能勢慎吉

塙忠銀

明治十六年二月

校正

阿部柳助



